一つテンヤの作法

テンヤの長所を生かし多角的にアプローチする。

【リアクションの誘い】

●エサ持ちのよい生きエビならではの誘い。竿を小さく鋭くシャクリ、テンヤ（エビ）を小刻みに跳ね上げる。シャープでパワーのある竿が向いている

【リフト&フォール】

●一つテンヤの基本形といえる誘い。竿を下向きに構え、上へと上げ、テンションを（またはフリー）フォールさせる

◀角島沖の大ダイ狙いでは底から5～20メートルの間に出るマダイの反応を狙う。海底付近はキダイやアオハタ、宙層でどう食わせるか、当日のその答えが巻きテンヤだった。8.2kgのマダイが釣れた時の探見丸スマートの画面

【巻きテンヤ】

●タイラバのように一定速度で巻き上げて誘う。底層に浮いたマダイや、上方向への誘いに反応する際に有効。深場で重いテンヤを使うことが多いため、パワーのある竿とリールが向く

ロッドをエンゲツXR B235 M+++に換え、リアクションからのフォールで食わせた

でテンヤを止め、ダイレクトにマダイの反応が出ている宙層を探る。

効果はてきめん、レンコダイのアタリは消える。ここからマダイへアプローチする誘いは主に3パターン。

・リフト&フォール
・リアクション（シェクリ）
・巻きテンヤ

海底から5～20メートルの宙層を、どのようなアクションにマダイが反応するのか探っていく。

探見丸は海底から5～20メートルの間に大ダイらしき反応を映し出す。だが、リフト&フォールでも、リアクションでもアタリは出ない。

ここで活躍したのがタングステン製の30号ロータイプのエンゲツXR B235 M+++をセットしたベイトテンヤゲーム。ロッドが8フィート3インチ（約250cm）と長く、ルアーのように遠投できるため上層を広く探ることができる。

ここまでくると、ほぼ一発逆転で巻きテンヤに食ってくる。

「ここまでやったんだから」と思いながら、根気を強いた宙層を探ってきたからこそ、ヒットしたときの喜びもひとしおだ。

ラインを引き出すファイトしながら、潮の向こうから泡をともなう白い影が浮き上がる。

開始から3時間半。海面からタナを取り、様々なあいを駆使した末に釣り上げたマダイは2キロ級であった。

折本さんはその答え合わせをするべく、同じパターン、同じタックルで釣り続ける。すると30分もたたぬうちに2枚目のマダイがきてヒット。今度は先ほどよりも大きな、目測で4キロは超えている大ダイだ。

「潮はあれば大きい。だが、どうやって食わせるかが問題」このときの答えは「巻きテンヤ」だった。

底を切って潮が止まり、アタリも少なく後悔を繰り返した後、再び食いが立つ時間が訪れる。

ここで折本さんは巻きテンヤに固執することなく、スピニングタックル・XR B235 M+とリアクションでのリフト&フォールとリアクションで探り、フォールで止めたときに出たアタリをとらえ、3枚目のマダイを手にする。

「ルアーから一つテンヤにアプローチすると、止めても食ってくるバイトの深さに驚かされます。つまり食わせの『間』を取ることができる。これは一

© Presented by SHIMANO

【取材協力】北九州市大里門司港・四季丸